

聾学校における古典教材

～『平家物語』の試み～

高木 智史

本校では一般入試で大学を受験する生徒が増えている現状から、古典教育の充実を図る必要がある。しかし、多くの聾学校と同様に古典の扱いは現代文と比べると軽いと言わざるをえない。生徒の実態や授業時数などの問題からある程度は仕方のない面もあるが、何らかの工夫によって充実した指導を実践する必要性を感じている。そこで、本稿では既存の学習事項や知識にゆさぶりをかけることで指導内容の充実を図ることを模索した。特に『平家物語』に焦点を当て、現行教科書の採録状況やそこから浮かび上がる課題等も含めて、聾学校における古典教材を検討してみたい。

キー・ワード：平家物語 祇園精舎 灌頂の巻 既存学習 声の質

1 はじめに

聾学校における古典の扱いは現代文と比較するとあまり重きを置かれていないように感じる。その理由としては、生徒の実態、つまり健聴児よりも世界知識が不足していることや言語習得に時間が必要なこと（四日市（2007）、高等部の教育（2012））などと深い関わりがあるように思われ、その意味では聾学校における現代文重視の傾向はやむを得ない面もある。

しかし、本校のように年々一般大学への進学を目指す生徒が増えると共に、文系・一般入試を希望する生徒が増加している状況においては、逆に古典指導の必要性は高まっていると言えるだろう。特に、近年では毎年のように高校三年生の選択授業で古典を受講する生徒が七名程度おり、一年次からの継続的な古典指導を考えて学習を進めていくことが必要な時代になってきたと考えている。今後もこのような傾向は続くと思われるため、聾学校における継続的な古典学習のあり方を模索する必要性が生じていると言えるだろう。

そこで、本稿では聾学校における古典学習の問題点を確認し、聾学校に適した古典教材を模索してみたい。

2 聾学校における古典学習の課題

聾学校における古典学習、ひいては教科指導における問題点も含めて考えてみたい。

聾学校高等部普通科では、「高等学校に準ずる教育」を行うと共に、障害への配慮を要することは周知の事実である。そのため、教育課程における国語科必修科目も「国語総合」のみに設定され、それ以外は各学校の裁量に委ねられている。本校では大学進学や専攻科進学など幅広い進路に対応するため、「国語総合」以外にも「現代文B」「国語表現」が必修科目として、「現代文演習」「小論文演習」「古典B」「基礎国語」が選択教科として設定されている。しかし、これらの科目の多くが週二時間設定であり、行事との関係で授業が継続して行えないことも多い。生徒への課題等で知識の定着を図るように指導者側が工夫をしているが、健聴の学校と比べると、授業時数そのものが絶対的に少ない状況にある。

また、これ以外にもいくつかの問題点が考えられる。例えば教科指導・アンケート結果（1994）を参考にすれば、「基礎学力が十分身に付いていない」、「能力差が大きいのので、グループ指導が困難である」、「指導内容が定着しない」、「学習意欲が低い」、「学習内容が高度になるほど、既習事項との関連や解決の手順等、基礎理解が土台となるが、既習事項の定着が悪いため、内容を高めていくことが難しい」

などといったことは現在も大きくは変わらない問題として残っている課題であろう。さらに佐藤(2008)によると

今回、調査を行った聾学校について、ほとんどが高等部3年間で国語総合に費やしている。(中略) また、実際に国語総合の中には、古文・漢文が含まれているが、現代の文章の項目だけに時間がとられてしまう傾向がみられた。

という指摘も含めると、多くの聾学校高等部において、授業時数の確保や生徒の学習への意欲を高めること、定着を図るということに加えて、古典学習そのものに力点を置くことが難しい状況にあると言えるだろう。

だが一方で、本校のように一般大学進学を目指す生徒が増えているということを考え合わせるならば、古典学習は避けて通ることができない。さらに、『平成二十一年高等学校学習指導要領』「国語総合・[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項] 伝統的な言語文化に関する事項」では、「(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。」「平成二十年小学校学習指導要領」 「伝統的な言語文化に関する指導の重視」という項目には「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している。」とあり、高等部段階に留まらず、早期から古典学習を重視することが一般的には求められてきている。その意味では、準ずる教育を掲げる聾学校においても、古典学習を行うための方法を考える必要があると思われ、授業時数の問題等を考えながら、より効率的な古典学習のあり方を模索することで古典の学習機会を生徒に与えていく工夫をすることが大切ではないだろうか。

では、効率的な古典学習とはどのようなことが考えられるだろうか。聾学校では授業時数が少ないと

いう問題に加えて、先のアンケートに「新しい教材では初めて出会う言葉や知識についての解説に多くの時間を要し、教材のねらいの核心にせまって理解を深める時間が確保しにくい」という指摘もあり、新しい教材は時間が取られるため、一から教える場合には慎重な検討が必要である。とりわけ高等部段階における古典のように多くの学習する内容が一から教えなければならないという場合には教材選定そのものが難しくなってくるだろう。生徒の実態を掴むまでは新しい教材を取り上げること自体にためらいさえ覚えるのである。

しかしこのような状況を逆に考えると、新しい教材ではなく、既存の教材を使うという方法を考えてもよいのではないだろうか。小学部・中学部段階で学習した内容をさらに深めることで生徒の知識を広げていくという可能性もあるのではないかと考えている。それは四日市(1996)が

すでにもっている概念や考え・ルールなどに“ゆさぶり”をかけ、新しい情報を獲得させていくなかで、より高次のものに高めていく。

という指摘と呼応する教育活動と言え、既に学習した教材を再度高等部段階に合わせて焼き直すことで新しい学習内容を生徒に学ばせるということに繋がるだろう。

そこで本稿では一つの試みとして、中学時代に多くの生徒が学習する古典教材の中から『平家物語』を取り上げ、聾学校高等部における高次の指導内容を考えてみたい。特に聾学校において必修教科とされている国語総合に焦点を当てることで、高等部一年次に行う古典学習を模索してみたい。

3 『平家物語』の採録状況から考える学習の問題点

『平家物語』は多くの教科書に採録されており、教科書定番教材と言える作品の一つである。試みに国語総合の採録状況を挙げてみる(表1)と、国語総合におけるほとんど全ての教科書に採録されて

いる状況が確認され、さらに多くの教科書において「祇園精舎」と共に「木曾の最期」が採録されている。また、「木曾の最期」を採録しない場合にも、その代わりに「義経の最期」や「宇治川の先陣争い」が採られている状況を考えると、国語総合における『平家物語』は合戦の話を採用する傾向にあり、この合戦譚を生徒に学習させたいという意図が感じられる。

教科書採録状況(平成29年度版)		
出版社	教科書名	採録箇所
1 東京書籍	新編国語総合	「木曾の最期」
	精選国語総合	「木曾の最期」
	国語総合古典編	「木曾の最期」/参考「祇園精舎」
2 三省堂	高等学校国語総合古典編	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	精選国語総合	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	明解国語総合	「祇園精舎」
	精選国語総合古典編	「祇園精舎」/「木曾の最期」/「義経の最期」
3 教育出版	国語総合	「祇園精舎」/「木曾の最後」
	新編国語総合	「宇治川の先陣争い」
4 大修館	国語総合改訂版古典編	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	精選国語総合改訂版	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	新編国語総合改訂版	「壇の浦の戦い」
5 数研出版	改訂版国語総合古典編	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	改訂版高等学校国語総合	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	新編国語総合	「木曾の最期」
6 明治書院	新精選国語総合古典編	「富士川」/「巴」/「坂落」/「能登殿最期」
	新高等学校国語総合	「富士川」/「巴」/「坂落」/「能登殿最期」
7 筑摩書房	精選国語総合古典編改訂版	「木曾の最期」
	国語総合改訂版	「木曾の最期」
8 第1学習社	高等学校改訂版国語総合	「祇園精舎」/「木曾の最期」
	高等学校改訂版標準国語総合	なし
	高等学校改訂版新編国語総合	なし
	高等学校改訂版新訂国語総合	「祇園精舎」/「木曾の最期」
9 桐原書店	新探求国語総合古典編	「祇園精舎」/「木曾の最期」

表1 平成二十九年度「国語総合」『平家物語』採録状況

では、このような採録状況の中、どのような学習目標や学習活動が求められているのであろうか。本校で使用している東京書籍『新編国語総合古文編』の指導書を例にとってみると、「主題」は「死を前にした義仲、兼平主従の恩愛の深さ」、「学習の手引き」^[3]には「義仲と兼平、それぞれの死の描かれ

方について話し合おう。」、その解説には「二人の死の描かれ方は対照的である。兼平の豪傑壮絶な死は、義仲のみじめな死に方の印象をより鮮烈にしている。義仲が敵の手にかかってしまったのは兼平への断ちがたい愛情からであって、兼平が自害するのもひとえに主君への愛情と、武士たるものの意地を示さんがためである。」と書かれている。このような主題、学習の手引きから考えると、『平家物語』に求められていることは生徒達が義仲と兼平の愛情の物語を理解することが目指されていると言えるだろう。戦乱の世にあって、血は繋がってなくても幼い時から一緒に育った肉親同様の二人が見せる、単なる主従関係にとどまらない絆を読み取ることで、心を打たれる生徒もいると思われる。その点では、思春期の生徒が心を育む教材として有意義であると言えるだろう。

また、学習活動として『平家物語』では音読や朗読といった音声化作業が推奨されることが多い。なぜなら、『平家物語』は作品の成立当初から琵琶法師の手によって語られ、音便や擬声語、対句などが多用される語り物という形態を有しているため、音声化の作業が本文の読みに効果的であることは否めないからである。特に近年では、音読や朗読、群読などが理論化され、様々な教育実践が報告されており、先の指導書にも「本教材のまとめ・発展」という箇所に「音読」や「朗読」の文字が見えることからすれば、声に出すという作業と『平家物語』の学習が一体化していると言っても過言ではない状況が看取される。(音声化行為に関して、例えば中村(2005)は、「音読」を「理解のための音声化行為」、「群読」を「理解をふまえた伝えるための表現行為」と分類し、『平家物語』を理解するための方法として位置付けている。)

しかし、このような『平家物語』の扱いは健聴の学校を想定した学習活動と思われ、聾学校の現場にそのまま反映してよいのであろうか。

まず、聴覚に障害を持つ生徒に音声化作業を推奨することの困難さを考える必要がある。生徒によって聞こえの程度は様々ではあるが、多くの生徒がリ

ズムを合わせて読み合わせることが難しいため、一斉読みや群読が成立しにくいという現状がある。さらに、音読を行わせても音の高低や微妙な音質を理解することが難しいため、結局は自分の感覚だけで読む生徒が多くなってしまう。従って、聾学校においては健聴の学校と同じような音声化作業の効果を期待することが難しいため、何か別の教育目標や活動を考える必要があると思われる。

次に、現在の採録状況のもとで授業を行うことの危険性という問題がある。大津（2003）は「木曾の最期」の場面を取り上げ、

義仲と兼平の物語は、人は死に際しても名誉を重んじるべきだと教えつつ、「融合的愛」の尊さを《教育》する。死を前にしてまでも相手を求め続ける無償の愛は、確かに美しい。しかし、それは極めて依存的な愛の形態であり、不健全でもある。この依存的で退嬰的な愛を、それと知らずに《教育》して、母子依存的な日本文化の再生産に寄与することが、優れた仕事だとは思えない。

と指導者側の無意識的指導に警鐘を鳴らしているが、健聴の生徒に比べて耳から情報を得ることが少ない聾学校においてこそ大津氏の指摘は重く受け止める必要があるのではないだろうか。つまり、指導者側の説明が全てとなる可能性もある聾学校においては「依存的で退嬰的な愛」が素晴らしいものとして教育され、生徒がそのまま受け入れる危険性を否定できないのである。さらに大津（2005）は音声化作業である群読に関しても、

ではいったい何のために群読するのか。群読の実践者はそれに自覚的でなければならない。なぜなら、戦時下において機能したように、群読には感情を高揚させ、ある特定の「教育」をする力が確かにあるからである。とりわけ『平家物語』を素材とする際には、戦争という暴力を扱っているというその内容からも、明治近代以降「国民的文学」と称されて国民のあるべき教養として教育されてきたその経緯

からしても、常にある危うさがつきまとわざるをえないのだ。群読が内包する危うさ、『平家物語』が内包する危うさ、この二つが出会うのである。その危うさに自覚的であることが、教室で『平家物語』を群読する際の前提であると思う。

と二重の危うさを指摘している。先に指摘したように群読を行うことが難しい聾学校ではあるが、もし聾学校において指導者側の自覚なく群読を行うのであれば、単一な情報のみが伝達されることで、より特定の教育が行われる可能性がある。その意味では、聾学校の指導者こそ『平家物語』の危うさを自覚する必要性があると言えるだろう。

さて、ここまで『平家物語』を学習する上での問題点を確認してきたが、これらに加えて聾学校における授業時数の問題等も考慮に入れると、現行の採録状況のまま授業を行うことの弊害は大きいだろう。そのため『平家物語』学習において、何か別な視点から教材を考えてみることも必要ではないだろうか。先の四日市が指摘するような既存の内容、『平家物語』であれば中学部時代に多くの生徒が学習する「祇園精舎」を深めることで聾学校に合った教材が考えられないだろうか。「祇園精舎」の本文を検討し、聾学校にあった学習目標を設定することも含めて模索してみたい。

4 「祇園精舎」と「女院死去」の比較から声の質を考える

【本文一】「祇園精舎」

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、楽しみをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁ふる所を知らざしければ、久しからずして、亡じにし者どもなり。近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、

康和の義親，平治の信頼，此等はおごれる心もたけき事も，皆とりどりにこそありしかども，まちかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様，伝へ承るこそ，心も詞も及ばれね。

【本文一】は『平家物語』「祇園精舎」の部分である。始発部分の「祇園精舎」から始まる一節は多くの人が中学部段階で暗唱をした経験があると思われるが，本文の形に目を向けると高等部段階においても一度学習する意義が見いだせるように感じる。

例えば【本文一】は和漢混淆文体と言われ，漢語を多く交えた文語文であるが，その漢語や人名の読みを確認すると長音になるものが多い。高等部段階の古典で最初に学習するのは歴史的仮名遣いが主流だと思われるが，その中の母音が重なって長音化する仮名遣いを実際の本文でまともって確認することは難しい。しかし，この冒頭部には「双樹（さうじゅ）」や「趙高（てうかう）」，「王莽（わうまう）」など母音の長音化を確認することができる言葉が多く，本文を読みながら学習の確認ができる。さらに，もし中学部段階で暗唱しているのであれば，漢字を読めない生徒はいないため，文を読むことへの抵抗感は薄められるだろう。さらに，なぜ中学部段階の時にそのような読みをしたのかということを歴史的仮名遣いという面から確認をすることもできるため，導入教材として有意義だと思われる。このようなことから授業展開例を示してみると，

- ①歴史的仮名遣いの学習
- ②「祇園精舎」の暗唱の確認。
- ③「祇園精舎」の本文を配布し，読ませる。

④歴史的仮名遣いのみで記した本文を配布し，読ませる。

⑤二種類の本文を比較し，音の変化を確認させる。というようなことが考えられるだろう。また，このような活動は聾学校のように耳だけでは音が理解しにくい生徒が文字を通して音の変化を確認することができるため，学習内容の理解に差が生じにくいと思われる。そして，導入期にこのような活動を行うことで，特に聾学校の生徒に対してではあるが，本

文を読むということへの意識を少しは高められるのではないだろうか。授業を行っていると時々，三年生の段階になっても歴史的仮名遣いの本文をそのまま読む生徒に出会うが，そのほとんどが耳から情報を得にくい生徒のように感じている。そのような生徒であっても，学習の始めの段階で，古文の読みはそのままではなく，音が変化するという意識を植え付けることは大切であり，意識付けの教材となり得る可能性があるだろう。

また，このような活動を導入として位置づけて作品に興味を持たせた後，「祇園精舎」の内容を掘り下げること，つまりは既存の知識にゆさぶりをかけることが大切かと思われる。例えば【本文一】は，諸行無常・盛者必衰という人生の無常を感じながら，反逆者達が滅び，平清盛の異常さが示されるという内容である。このような展開からこの章段のみに限って主題を考えれば，清盛批判ということになるだろう（門前真一・1964）。しかし実際の授業において「祇園精舎」の部分扱う場合，始発部の諸行無常・盛者必衰に焦点が当てられ，ここに『平家物語』全体を貫くような無常観が示されている，というような読み取りが為されることが多いのではないだろうか。そして，この無常観の内実が特に示されことなく授業が進められるということはないだろうか。

しかし，この『平家物語』「祇園精舎」における諸行無常は渡辺（1936）によれば，仏教本来の「すべて現象は変化する」という意味ではなく，「人生のもろさ，はかなさを嘆く」という意味で用いられており，内容に変化が生じていると指摘される。さらに富倉氏が

実はこの句は，現在鑑賞の対象とする『平家物語』の本文——方流の語り物本文——としては，結びの灌頂の巻にある「寂光院の鐘の声，今日も暮れぬと打ち知られ」と対照して，この物語全編を読み語る間中鳴り続ける無常の鐘のようではあるが，この灌頂巻の成立が実は十四世紀であることを思うと，この冒頭句は『平家物語』の成長過程の初めには，そんなに深い意味を持つものではなく，ただ人の世

のあわれを、あるいは敗れ去った者のあわれを静かに弔う言葉といってもよいくらいのものであったと思われるのである。それがやがて何か意味深い言葉として、灌頂巻と対応するように、『平家物語』が成長していったと言ってもよいのである。

と指摘するように、「祇園精舎」における諸行無常は灌頂の巻との比較において意味を為す語であると思われる。その意味では、この灌頂の巻を読むことなく「祇園精舎」の主題として無常観を扱うことには問題があり、生徒が理解することは難しいのではないだろうか。

そこで、高等部段階の発展的学習としてこの灌頂の巻を読み、「祇園精舎」の無常観に関する知識にゆさぶりをかけることを考えてみたい。

【本文二】「女院死去」

¹ さる程に寂光院の鐘の聲、けふも暮れぬとうち知られ、夕陽西にかたぶけば、御名残惜しうはおぼしけれども、御涙をおさへて還御ならせ給ひけり。女院は今更にしへをおぼしめし出でさせ給ひて、忍びあへぬ御涙に、袖のしがらみせきあへさせ給はず。はるかに御覧じおくらせ給ひて、還御もやうやうのびさせ給ひければ、御本尊にむかひ奉り、「² 先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓証菩提」と、泣く泣くいのらせ給ひけり。³ 昔は東にむかはせ給ひて、「伊勢大神宮、正八幡大菩薩、天子宝算、千秋万歳」と申させ給ひしに、⁴ 今はひきかへて、西にむかひ手をあはせ、「過去聖霊、一仏浄土へ」といのらせ給ふこそ悲しけれ。御寝所の障子に、かうぞあそばされける。

このごろはいつならひてかわがころ大宮人の
こひしかるらん

⁵ いにしへも夢になりにし事なれば柴のあみ戸も
ひさしからじな

御幸の御供に候はれける徳大寺左大臣実定公、御庵室の柱に書きつけられけるとかや。

いにしへは月にたとへし君なれどそのひかりなき
深山辺の里

こしかたゆくすゑの事どもおぼしめしつづけて、御涙にむせばせ給ふ折しも、山郭公音信れなければ、女院、

いざさらばなみだくらべん時鳥われも⁶ うき世にねをのみぞ鳴く

【本文二】は灌頂の巻「女院死去」の場面の冒頭であり、寂光院に隠棲する女院（＝建礼門院）を後白河法皇が尋ねたところである。女院は後白河法皇が還御された後、一人『平家物語』の菩提を弔いながら、傍線部1「さる程に寂光院の鐘の聲」が【本文一】の「諸行無常の鐘の聲」と響き合う形で『平家物語』を終結に向かわせている。この場面において女院は傍線部2「先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓証菩提」と一門の成仏を願う。さらに、その祈りを際立たせるかのように傍線部3と傍線部4で昔と今の対比が行われ、傍線部5「いにしへ」の栄華が夢になった状況や傍線部6「うき世」に生きなければならぬ嘆きが女院本人から吐露されることによって、人生の儚さが示されることになる。そして、この場面が「祇園精舎」とつながっているならば、このような女院の思考がそのまま「祇園精舎」の無常観に通じていくことで初めて、「祇園精舎」の無常観の内実が生徒に理解されるのであろう。その点では、授業において生徒の知識にゆさぶりをかける教材として、「祇園精舎」における無常観を焼き直す教材として、【本文二】を生徒に提示することは有意義な活動となっていくと考えている。

また、このような学習を聾学校で行うことは、生徒が本文の中に潜む音の質、つまり、どのような声で本文を読むべきか、ということを考える契機となるのではないだろうか。以前、授業で生徒に知っている古典作品を聞いた時、ある生徒が『平家物語』を挙げ、「祇園精舎」を暗誦し始めたことがあった。しかし、その生徒は「祇園精舎」の中に流れる人生の儚さのようなものを表現することなく、大きな声で元気よく暗誦していた。この時、耳から情報を得ることが難しい、もしくは指導者側が無常観と言ったところで、それを感じるのが難しい生徒がいる

とわかった。そして、実際に古典作品の本文を読む体験を通して、作品に流れる音の質を体験させる必要性を感じたが、今回のような活動を通すことで音の質を理解し、自分が暗誦する際の声の質にも影響を及ぼすと考えている。さらに、導入期にこのような体験をすることで、作品それぞれが異なる音を持つこと、つまり、小説において悲しい場面であれば悲しい声で、楽しい場面であれば明るい声で読むことを古典作品の中でも実践する必要があることを感じてくれるだろう。

おわりに

聾学校には健聴の学校とは異なる指導上の問題がいくつもある。そのため、指導者側の工夫が求められることは多いが、その試みの一つとして、既存の知識にゆさぶりをかけて深めるということが大切だと考えている。そして、このような活動を増やしていくことが、聾学校の授業時数の問題など他の問題解決の一助となると信じている。今後も他の古典作品を検討し、聾学校にあった古典教材を模索していきたい。

【付記】

本研究は、平成28年（2016年）10月14日に開催された第50回全日本聾教育研究会大会（附属大会）において、口頭発表したものを、加筆・修正したものである。

なお、本文、章段名は全て小学館『新編日本古典文学全集』による。

【参考文献】

- 四日市章(2007) 読み書きの力と教科学習, 第34回講習会講演
 聾教育実践研究会編(2012) はじめの一步—聾学校の授業—
 教科指導: アンケート結果(1994) 聴覚障害(6)
 4-16
 佐藤正幸(2008) 聾学校高等部から大学基礎教育課程への移行に関する調査研究 筑波技術大学テク
 ノレポート 15 145-148

- 文部科学省(2009) 高等学校学習指導要領
 文部科学省(2008) 小学校学習指導要領
 東京書籍 新編国語総合古文編 指導書
 四日市章(1994) 『聴覚障害児の教育と方法』 株式会社コレール社
 中村佳文(2005) 『平家物語』群読の理論と効用—
 解釈から表現への授業展開— 早稲田大学国語
 教育研究 第25集
 大津雄一(2003) 義仲の愛そして義仲への愛『〈新
 しい作品論〉へ, 〈新しい教材論〉へ』 右文書
 院
 大津雄一(2005) 何のために—『平家物語』群読の
 危うさ 『声の力と国語教育』 学文社
 門前真一(1964) 平家物語序章の解釈 『仏教文学
 研究』二 法蔵館
 渡辺照宏(1936) 『仏教』 岩波書店
 富倉徳次郎(1979) 『平家物語』 角川書店